

# 神奈川県における乳幼児の突然死に関する疫学的研究 (分担研究：乳幼児の突然死に関する研究)

坂上正道

渡辺 登、門井伸暁

**要約：**神奈川県における乳幼児の突然死、特に乳幼児突然死症候群の実態を明らかにするために、SIDS 実態調査プロジェクト委員会を組織し、平成2年1月から12月末までの1年間のアンケート調査を実施した。アンケート調査の回収率は57.7%であり、2次アンケートの結果突然死症例39名、ALTE 症例10名の回答を得た。

このうち広義の SIDS は27名(狭義の SIDS 17名)であり、出生1000人に対する本症の発症頻度は0.34(狭義の SIDS 0.21)であった。本症は男児にやや多く見られ、発症年齢は5ヶ月にピークがあり5ヶ月以内に77.8%が発症していた。発症時期には一定の傾向はなかった。発症場所は自宅が77.8%と圧倒的に多かった。発症時刻は朝方に37.0%とやや多いが一定の傾向はなかった。発症状況は睡眠中が74.1%と圧倒的に多く、睡眠場所は布団が多く、体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、一人寝が圧倒的に多かった。今後も詳細な疫学調査を継続することにより疫学的危険因子の解明が必要と考えられた。

**見出し語：**乳幼児突然死、SID、乳幼児突然死症候群、SIDS、アンケート調査

## 目的

神奈川県における乳幼児の突然死(SID)、特に乳幼児突然死症候群(SIDS)の発症頻度、発症年齢、発症時期、発症時刻、発症状況などの特徴を明らかにすること。

## 方法

広く神奈川県下の医療機関の協力を得るために、県医師会、県産科婦人科医会、県小児科医会、県衛生部、各大学医学部小児科学教室などの協力を得て神奈川県 SIDS 実態調査プロジェクト委員会を組織した。アンケート調査は1次と2次に分けて行った。アンケート期間は平成2年1月から12月末までの1年間とした。1次アンケート調査は、

官製葉書を用いて2才未満の乳幼児の突然死症例及びニアミス症例の経験の有無を、平成2年6月、10月及び平成3年1月の3回に渡って調査した。1次アンケート対象医療機関は、小児科、産婦人科、内科、外科、無料を標榜の医院・病院・診療所、休日急患診療所、救命救急センターなどとした。1次アンケート調査で経験ありの回答を頂いた医療機関及び県下各大学医学部法医学教室に対して2次アンケート調査を実施した。2次アンケート調査の内容は症例の氏名、性別、生年月日、死亡または救命年月日及び時刻、異常発見の場所・時刻・状態、睡眠中の場合は寝方、診察時の状態・経過、診断名、剖検の有無、剖検主要所見、

北里大学病院小児科

新生児歴などとした。

## 結果

1次アンケート回収率は、1回目57.5%（返信1826/往信3176）、2回目58.0%（1821/3137）、3回目57.5%（1788/3108）であり、1年間の合計では57.7%（5435/9421）であった。1次アンケートの結果、突然死症例39名、ニアミス症例24名の回答を得た。

これらの症例（突然死症例39名、ニアミス症例24名）及び各大学法医学教室に対する2次アンケート調査の結果、法医学教室からも18名の突然死症例の回答が得られたが、1次アンケートにおける旧症例、誤症例、誤回答、及び医療機関と法医学教室の重複症例（6名）などを除くと、最終的に有効な回答を得られたのは突然死症例39名、ニアミス症例10名であった。

乳幼児突然死（SID）症例39名について詳細を検討した。性差は男児24名（61.5%）、女児15名（38.5%）と男児に多く認められた。発症年齢は図1に示すように5ヶ月以内の乳児に好発していたが、6ヶ月以降は激減していた。発症時期は春と秋にやや多いが一定の傾向はなかった。発症（発見）場所は自宅28名（71.8%）、病院医院5名（12.8%）、保育所3名（7.7%）などと自宅が圧倒的に多かった。発症（発見）時刻は朝にやや多いが一定の傾向はなかった。発症（発見）状況は睡眠中26名（66.7%）、起床直後、授乳直後がそれぞれ2名（5.1%）、その他不明9名（23.1%）と睡眠中が圧倒的に多かった。診断名は図2に示すように乳幼児突然死症候群（SIDS）が23名（58.9%）と過半数を占めていた。剖検率は64.1%（有り25名）と非常に高かった。新生児歴は過半

数の症例で不明のために十分な検討ができなかった。以上のようにSID 39名の詳細を検討した結果、診断名の記載のなかった2名、窒息及び心不全の各1名は臨床的に明らかにSIDSと判断し得たので広義のSIDSに含めて分析を行った。

広義のSIDS 27名（このうち17名は剖検にて診断された狭義のSIDSである；剖検率63.0%）について詳細を検討した。性差は男児15名（55.6%）、女児12名（44.4%）と若干男児が多かった。発症年齢は図3に示すように5ヶ月にピークが認められ、27名中21名（77.8%）は5ヶ月以内の乳児に好発していた。発症時期は図4に示すように冬がやや少ないが一定の傾向はなかった。発症（発見）場所は図5に示すように自宅21名（77.8%）、保育所2名（7.4%）、病院医院2名（7.4%）、その他2名（7.4%）と自宅が圧倒的に多かった。発症（発見）時刻は図6に示すように5時から8時の朝方に10名（37.0%）とやや多いが一定の傾向はなかった。発症（発見）状況は図7に示すように睡眠中が20名（74.1%）と圧倒的に多かった。睡眠中の20名について寝方を検討すると、図8に示すように場所は布団が多く、図9に示すように体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、図10に示すように一人寝が圧倒的に多かった。新生児歴は不明な症例が多く十分に検討できなかった。

## 考察

本邦では過去のアンケート調査による広義のSIDSの発症頻度は出生1000人に対して0.044から0.08とかなり低いものであった<sup>1,2)</sup>。今回の私達の結果では、現時点で平成2年度の出生数が不明なために平成1年度の出生数79184人を分母にとると、神奈川県における広義のSIDSの発症頻度

は0.34であり、狭義の SIDS は0.21であった。今回のアンケート調査は回収率が57.7%と高く、2次アンケートにより症例の詳細が検討できたことに加え、SID 症例の剖検率が64.1%と高いことから実態をかなり正確に反映した信頼し得る数字であると思われる。

広義の SIDS は男児にやや多く見られた。発症年齢は5ヶ月にピークがあり5ヶ月以内に77.8%が発症していた。発症時期には一定の傾向はなかった。発症（発見）場所は自宅が77.8%と圧倒的に多かった。発症（発見）時刻は朝方に37.0%とやや多いが一定の傾向はなかった。発症（発見）状況は睡眠中が74.1%と圧倒的に多く、睡眠場所は布団が多く、体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、一人寝が圧倒的に多かった。新生児歴は不明な症例が多く十分に検討できなかった。以上の疫学的傾向は従来の報告とほぼ一致しており発症年齢が5ヶ月以内に多いこと、睡眠中に発症したと思われる症例が多いことなどが特徴であった。

以上今回のアンケートによる疫学調査で神奈川県における SIDS の実態がかなりはっきりしてきたが、今後さらに継続的な詳細な調査を行い、周産期新生児期の情報も含めて疫学的な危険因子の解明が必要と思われた。

#### 文献

- 1) 山下文雄、他. : 乳幼児突然死に関する研究、昭和60年度研究報告書:42-70、1986
- 2) 木部哲也、他. : SIDS と未熟型 SIDS の発生状況—愛知県下主要施設のアンケート調査から—、日児誌、94 (6) :1389-1394、1990

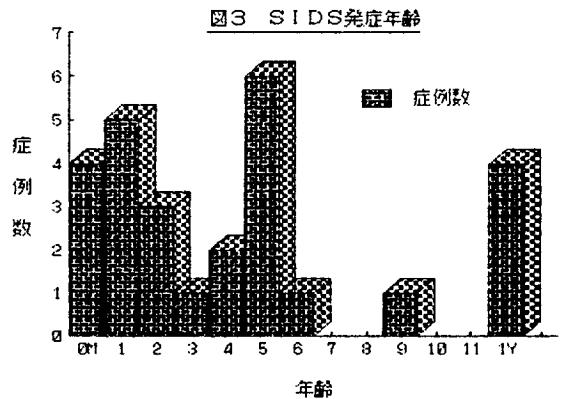
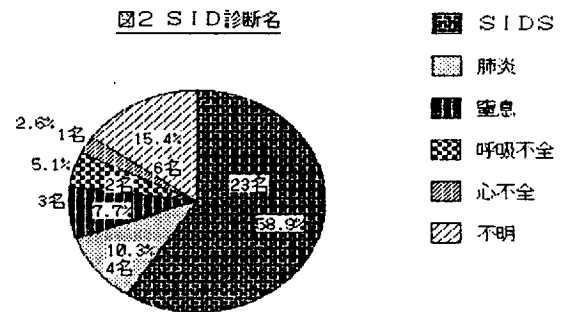
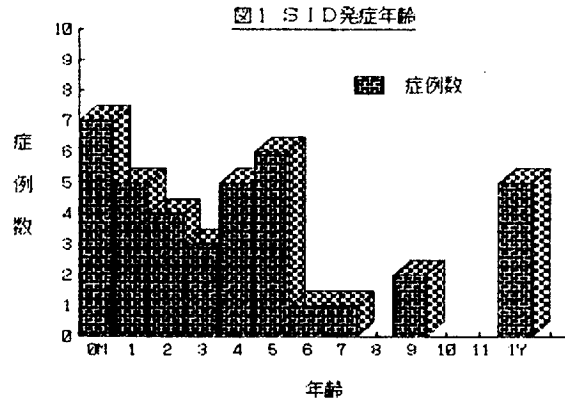


図4 SIDS発症時期

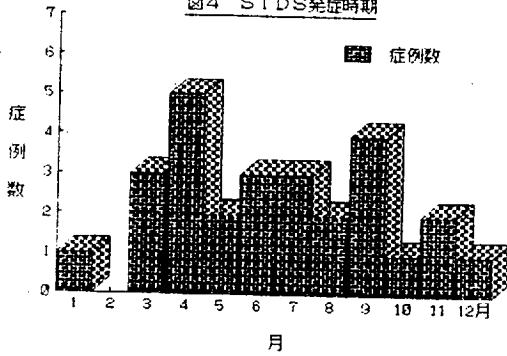


図8 SIDS睡眠場所

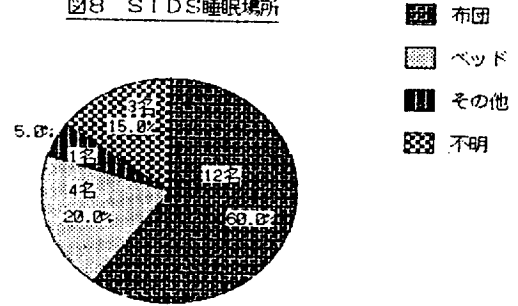


図5 SIDS発症場所

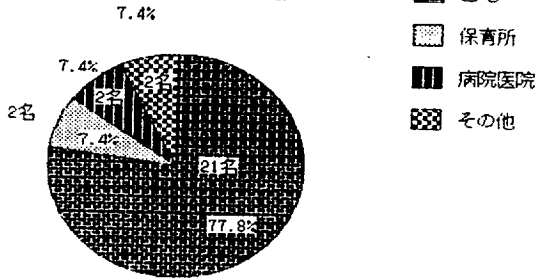


図9 SIDS睡眠時体位

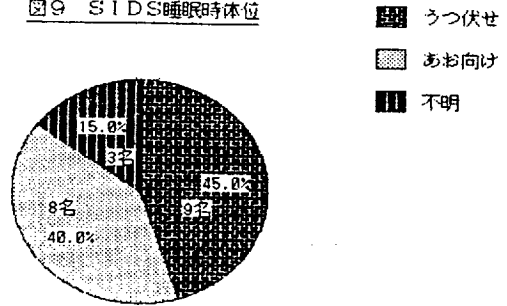


図6 SIDS発症時刻

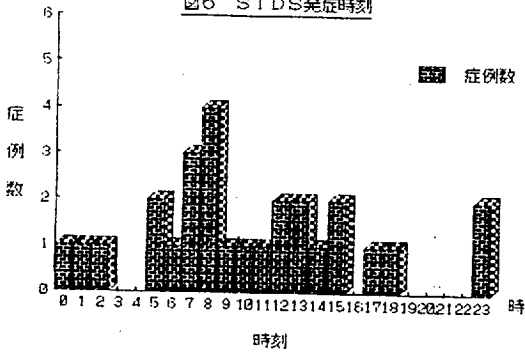


図10 SIDS睡眠状態

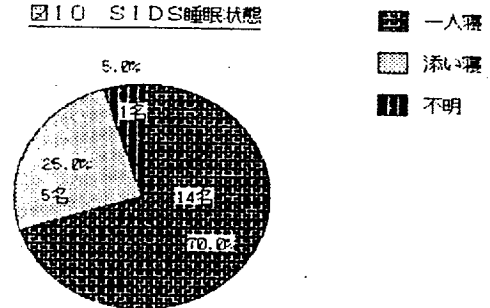
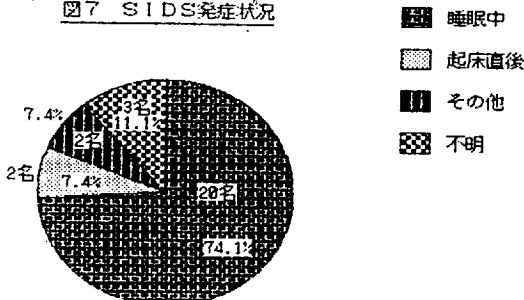
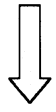


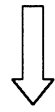
図7 SIDS発症状況





## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:神奈川県における乳幼児の突然死、特に乳幼児突然死症候群の実態を明らかにするために、SIDS 実態調査プロジェクト委員会を組織し、平成2年1月から12月末までの1年間のアンケート調査を実施した。アンケート調査の回収率は57.7%であり、2次アンケートの結果突然死症例39名、ALTE症例10名の回答を得た。

このうち広義のSIDSは27名(狭義のSIDS17名)であり、出生1000人に対する本症の発症頻度は0.34(狭義のSIDS 0.21)であった。本症は男児にやや多く見られ、発症年齢は5ヶ月にピークがあり5ヶ月以内に77.8%が発症していた。発症時期には一定の傾向はなかった。発症場所は自宅が77.8%と圧倒的に多かった。発症時刻は朝方に37.0%とやや多いが一定の傾向はなかった。発症状況は睡眠中が74.1%と圧倒的に多く、睡眠場所は布団が多く、体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、一人寝が圧倒的に多かった。今後も詳細な疫学調査を継続することにより疫学的危険因子の解明が必要と考えられた。